

# こころる便り

第143号  
平成24年2月

〒679-1434  
兵庫県たつの市新宮町大屋六六八一十二  
株式会社新宮運送グループ  
代表/木南 一志  
kiminami@shingu.co.jp  
電話 079-1-75-1212

## 流れをよくする

ようやく朝が少しずつ早くなってきました。まもなく立春。毎朝の掃除の中でも道路際の草が少しずつ緑に変わり始めています。厳しい寒さのさなかですが、今一番の寒さの後には、春の足音が聞こえるようになりそうです。まだまだ待ち遠しい暖かさですが、朝日も背中に浴びるとなんと暖かいこと。北風と太陽の絵本を思い出します。有り難いことです。

大自然は止まることなく、確実に時を刻みながら季節を動かしていきます。時計を持っているわけでもないのに、正確で狂いはありません。本来は、日出づる国の「立春」から季節は始まるのですが、人間の都合で勝手に西暦の一月一日となっています。自然の営みをすべて人間の都合で変えていつていいのかと考えることがあります。

車で走っていますと、右折したくても信号が変わるまで待たないと曲がれないとか、対向車が知らん顔して入れてくれないだとか、イライラすることがあります。時間がなくて急いでいるときはなおさらです。そんなときに事故を起こすのですが、実は、そのイライラの原因は、譲ってくれない相手にあるのではなく自分にあるのです。

普段から人に譲る運転をしている人は、不思議に譲ってもらえるようになっていきます。時間がギリギリでもラッキー！と思えるような青信号やどうぞお先にと道をあけて貰うことが出来るのです。事故を

しない人にも同じような法則があるようです。譲ってばかりいたら、前に進まないと考えている人は、良いということを知っても実行しない人です。

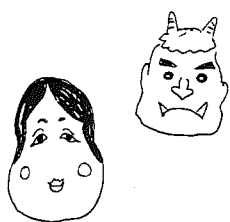
なぜ、相手になくて、自分に原因があるのかということは、自分から先に譲るといふ行動を起こしていれば、実感出来ることです。つまり、自分の都合を優先せずに、まず自分から譲ることを実行し続けると、ご褒美として100回のうち1回ぐらいは助けて貰えるのです。でも、助けて貰うために実行していると、逆にまったく譲って貰えなくなるのです。

自分から先に行動するためには、気づく人になること。人より先に気づいて実行していく。すると、流れがよくなるのです。パイプ詰まりで汚水があふれると回りは大変なことになります。普段からほんの少し掃除をしていたら…とあふれてから気づいても遅いのです。流れをよくするとは、自然の時の刻みに合わせるといふことです。だからこそ、守られるのです。

良い世の中にしていく方法は、他人に求めるのではなく、自分から先に譲ることです。あなたが変えていくのです。

東日本大震災の地にこころ寄せて

木南 一志 拝



## 尋常小學校修身書

### 5 稲むらの火 五兵衛 その1

「これは、ただ事ではない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、別に烈しいという程のものではなかった。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない無気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では、豊年を祝うよい祭の支度（しだく）に心を取られて、さっきの地震には一向気がつかないものようである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸いつけられてしまった。風とは反対に、波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、広い砂原や黒い岩底が現われて来た。

「大変だ。津波（つなみ）がやって来るに違いない。」

と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろ共（とも）のみにやられてしまう。もう一刻も猶予（ゆうよ）は出来ない。

「よし。」

と叫んで、家（いえ）にかけこんだ五兵衛は、大きな松明（たいまつ）を持って飛び出した。そこには、取入れるばかりになっているたくさんの稲束（いなばた）が積んである。

「もったいないが、これで村中の命が救えるのだ。」

と、五兵衛は、いきなりその稲むらの一つに火を移した。風にあおられて、火の手がぱつと上がった。一つまた一つ、五兵衛は夢中で走った。こうして自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまうと、松明を捨てた。まるで失神したように、彼はそこに突っ立ったまま、沖の方を眺めていた。

日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなってきた。稲むらの火は天をこがした。山寺では、この火を見て早鐘（はやかね）をつき出した。

（つづく）